



分科会 2 薬学教育は新たなステージへ ~医療人として求められる薬剤師の基本的資質~

10月7日(日) 15:00~17:30 第2会場(アクトシティ浜松 コンgressセンター 3F 31会議室)

W-02-03

学習成果基盤型教育 (outcome-based-education) に基づいた実務実習を目指して

ながた たいぞう
永田 泰造
日本薬剤師会

六年制薬学教育におけるコアカリキュラムは、平成14年に薬学教育モデル・コアカリキュラム、翌年に実務実習モデル・コアカリキュラム（合わせて：薬学部モデコア）が公表され、今日に至っている。これらの薬学部モデコアは、医学教育におけるカリキュラム改訂のために検討された課題を参考にし、臨床薬学教育の充実化を目指した教育目標となっている。当時のコアカリキュラム改訂の基本は、基礎教育に偏りすぎた四年制カリキュラムを、社会のニーズの変化に対応した、医療人として質の高い薬剤師養成のためのカリキュラムに変更することであった。さらに、見学型が中心であった病院・薬局実習を参加型の実習に変換することにより、より臨床能力を高めた薬剤師教育に対応することも求められた。これらの薬学教育の改善・充実を図るために改訂された実務実習モデル・コアカリキュラムでは、教育目標だけ明示された医学教育モデル・コアカリキュラム（医学部モデコア）と異なり、方略や評価についても具体的に示されており、ある意味、実習スケジュールを容易に組み立てることができる。しかし、受け入れ施設の指導薬剤師にとっては理解しにくい点も多く、より具体性のある解釈資料や実習スケジュール作成のための講習会等の開催を求められたことも事実である。カリキュラムについて、その意味は理解できても、経験のない者にとって、その応用は簡単に行えるものではない。実習生を受け入れ、指導経験を積むことが問題解決の第一歩であることは、今なら容易に理解できることである。「案ずるより産むが易し」という諺を思い浮かべる面もあるが、受け入れ経験を積むことのみですべての問題が解決するわけではない。学習目標における一般目標（GIO）と到達目標（SBOs）について、両者の関係のみに気を囚われ過ぎた対応により、より複雑あるいは重複した内容を個々のSBOごとに考えてしまうなど、指導薬剤師の理解度の差に起因するものもある。さらに、ユニットにおけるGIOとSBOsの関係に執着しすぎると、そもそもの薬学教育の理念を見失うことにも繋がりがかねない。また、SBOsを達成するための方略のみに固執すると、コースのGIOに示された具体的な絵姿を見失ってしまう危険性も否めない。指導薬剤師自身が、そもそもの学習目標であるGIOから、想定される学習者の学習後の絵姿を常に意識し、絵姿に近づくための方略を考え、そのチェックのための評価手法の策定していくことが「指導薬剤師の質」である。近年、欧米諸国における高等教育においては、学習成果基盤型教育⇒卒業時の到達目標から、それを達成するようにカリキュラムを含む教育全体をデザイン、作成、文書化する手法（OBE）、を骨組みとした教育が実践されている。このOBEは、コンピテンス基盤型教育（competence-based education：CBE）の基本を取り入れたものである。現行のカリキュラムプランニングとの違いを要約すると、はじめに三領域を包括する統合的な実践力等の卒業目標（学習アウトカム）を定め、学年ごとにそれぞれの成果（レベル）を設定していく。現行のカリキュラムにおける積み上げ方式とは全く逆の発想で全体を構成していく。医学教育においては、すでに学習成果基盤型教育を取り入れた改訂が行われており、各大学において導入が進んでいる。公表10年を迎えようとしている薬学部モデコアにおいては、この考え方に基づいた改訂が論議されている最中である。薬学部コアカリ改訂を踏まえ、学習成果基盤型教育による理想の薬剤師像と実務実習の将来像を考察したい。